

2. 研究の詳細

プロジェクト名	大学・附属幼稚園・附属小学校の協同による保育実践の開発 一人とかかわり，言葉でつながり合う幼児を育てる保育を目指してー		
プロジェクト期間	平成24年度		
申請代表者 (所属講座等)	山元悦子 (国語教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	加藤隆之 (美術教育講座)・丁子かおる(幼児教育講座)・千本木直行(美術教育講座)・松久公嗣 (美術教育講座)

「描画による造形遊び」に関して

目的 描画による造形遊びを通じて言葉で関わりあえる保育を実践し，幼児期の人間関係の形成において，同じ目的と同じ時間を共有できる造形遊びの有効性を実証していく。

内容 クレヨン作りという共通体験と大きな画面にクラス全員で描く共同制作をおこなう。幼児がこの造形活動によって発する言葉や他者との関わり方について，活動を記録し考察をおこなう。

方法 附属幼稚園の年長クラスを対象に，「クレヨン作り」と「クレヨンを使った描画の共同制作」の二回の保育実践を美術教育講座の加藤がおこなった。「クレヨン作り」は，粘土で作った型にクレヨンの素を流し入れて，500円玉程度の大きさのクレヨンを一人一つ作るという内容である。青色，黄色，赤色の三色のなかから好きな色を選んで作り，試し描きは他の幼児に色を借りて全色塗ってみることとした。「クレヨンを使った描画の共同制作」では，1m×6mの不織布に自製したクレヨンと版画用絵の具をつけたローラーを使って共同制作をおこなった。版画用絵の具には水色，朱色，黄緑色の三色を使用した。いずれの実践も，特定の幼児2名を決めて活動中の言葉を記録した。

研究成果 実践を通した所感と記録した幼児の言葉から考察をおこなうと，幼児の発言の多くは教員の説明や投げかけに対してのものが多かった。ただ，それがきっかけとなって周りにいる幼児に話しかけたり，配られた材料を見て会話が始まるという場面に繋がっていた。特に共同制作をおこなった2回目の保育実践では，自由に動いて描くことができたため，描きながらの会話や関わりを多く見る事ができた。反応を言葉にすることについては，やはり個人差があり目にするものすべてに発言する幼児や，反応はするがほとんど言葉を発しない幼児もいた。しかしいずれも他者との関わりは十分に持った活動として見る事ができた。今回の共同制作では，作品作りよりも行為や制作過程を重視している。これは，より遊びに近い状態で活動することが言葉とつながりを生み出すと考えてのことであり，実際に自由でのびのびとした活動を得ることができた。

研究成果としては，つながりを意識した造形遊びの有効性について，実践によってその効果の確証を得ることができた。ただ，課題点も明らかとなった。特に大学ー附属幼稚園との共同研究のあり方としての課題であるが，大学教員による単発の保育実践では，感動体験のような特別な経験を得ることが中心となってしまう点である。造形遊びやそれに伴う言葉を介したつながりは，幼児の日常生活のなかで少しずつ養われるものであり，担任教諭による継続的で一貫した取り組みが必要だと捉えている。また，表現活動のなかでも素材そのものの魅力が強かったり個々の活動が中心となる題材の場合，他者との関係性の形成よりも個人の活動の充足感で完結してしまう。そのためよりシンプルな素材で対話を取り入れた共同制作のほうが，人間関係を作る資質を養うことができると考える。これらの点を踏まえると，表現活動の内容や造形あそびの提案を大学教員がおこないながら，実践は継続した保育のできる担任教諭が受け持つという形が理想的である。特に専門的な部分に関しては，T2として大学教員が補助的に保育に加わるという形も取ることが出来る。今後の展望として，前述のような専門性も取り入れた実践方法を表現活動に取り入れて，共同研究をおこなう取り組みの一助にしていきたい。

資料写真



「絵本の読み聞かせを媒介としたことば育て」に関して

目的：絵本の読み聞かせによって提供された物語世界とことばが、幼児のころとことばをどう育てるのかについて、特に人とことばを介して関わるコミュニケーション能力に焦点を当てて考察する。

内容：絵本の読み聞かせを行い、その後絵本の世界を借りたごっこ遊びをすることにより、情感の共有や、ことば交わしの機会を作り、ことばによるコミュニケーション活動を促す。

方法：5歳児の幼児集団に対して、教師の読み聞かせを行う。その後読み聞かせで取り上げた絵本の内容に関わる遊びや創作活動を促し、その活動の中で、コミュニケーション活動に必要なことば(他者に向かって自分の意図を伝える・相談する・説明する等の機能を持ったことば)の育ちを促す。

資料とした絵本と、読み聞かせたあとに行った活動は次の通りである。

活動1 「しりとりのだいすきなおうさま」(中野翔子) 6月実施

しりとりのお好きな王様が家来に持ちかけたこまった命令を、おともだちとふたりで相談して、どうすればいいか考えてみよう。考えたことを先生に伝えてあげよう。

活動2 「すてきにへんな家」(タイガー立石) 10月実施

どんな家に住みたいか頭で想像してみよう。お友達の家を訪ねてみよう。

活動3 「100かいだての家」(岩井俊雄) 10月実施

好きな階を選び、四人組で新しいお部屋を相談して作って絵に描いてみよう。

活動4 「とんことり」(筒井頼子) 1月実施

新しく保育園にはいつてきた女の子に「いっしょにあそぼう」とお手紙を書いた女の子の物語をよんでもらって、ポプラ組のお友達にもおてがみや絵をかくてポストに入れてわたそう。

活動5 「おいしいの冒険」(古田足日) 2月実施

ネズミばあさんから来た手紙の答えを、グループで相談して考えよう。考えた内容を先生にしらせてあげよう。

研究成果：以下幼児の発話やことばのやりとりの観察を通じた考察をいくつか示す。

- ・活動1 ことばだけの世界(しりとり)で考えを伝え合うことは5月時点では困難な様子が見られた。話題に関するたくさんの体験や知識が前提に必要である。(話題：しりとりの素材であった食べ物の名前)
- ・想像が想像を産みそれを足していく.そしてそれをひとつの絵にする活動は幼児のことばのやりとりを生み出す活動として有効であった。また、このお話遊びを契機に、グループでダンボールを使って大きな家を作る設定保育への意欲づけができた。そして、その保育の中で、グループの仲間と相談し、役割分担しながら一つのものを作る姿を見ることができた。(活動2・3)
- ・活動4 お話し遊びを契機に、保育室に常時おいてあった郵便ポストに手紙を入れる姿が活動後も見られた。文字習得が必要であるため、限られた幼児への効果にとどまったが、手紙は優しい気持ちでことばを伝えるよい媒材となるようである。
- ・活動5 宝探しの要素を持つ活動は幼児の意欲を高めるのに有効であった。ネズミばあさんからの手紙を読むという文字習得が前提になった活動なのが難点であったが文字がよめる幼児が他の幼児に読んであげる姿が見られた。ネズミばあさんからの手紙の内容が、より幼児同士の相談のことばのやりとりを促すものとなるようさらに検討する必要がある。また、活動中の保育者の関わり方について、この活動では観察にとどまっていたので、どのような関わりが望ましいかを探究していきたい。

このような活動によって、ことばを介して友達とやりとりする力を育てることが本研究の目的である。そのためには、「やりとりのことば」の育ちを見取るための評価指標が必要である。平成24年度はこの見取りの指標を作成し、それを用いて幼児一人一人の実態を捉えることにも取り組んだ。それによってそれぞれの幼児固有の実態を共通の尺度で評価し、その結果から次の保育への方針を得るといふ、評価と次の活動とが連動した保育実践を行うことができた。

「幼稚園における幼児が絵や彫刻を楽しむ鑑賞教育の実践的研究

—幼児の言葉と表現を育む環境として—に関して

目的：本研究においては、子どもたちに合わせた言葉や表現を促す教材として絵画や彫刻作品を選定、その上でねらいを設定した。低年齢の子どもにとってたくさんの絵をみるよりは、まずは幼稚園の安心できる環境でゆ

ったりと気に入った作品を鑑賞できれば、作品鑑賞は楽しいものと感じられる。好きな絵について自分なりの想像をもとにお話ししたり表現したりすることで、多様な言葉が生まれると考え、幼児が「言葉でつながりあう鑑賞」について調査を行った。

方法：地域の美術館である直方谷尾美術館及び大学の3名の美術教育講座：共同研究者である教員に依頼し、作品選定と貸し出しを依頼し、協力をいただいた。子どもたちの生活の場である幼稚園の遊戯室には絵画を、3歳の保育室には木彫を設置した。好きな絵で約半数にクラスの子どもを分けて行い、附属幼稚園にて、同時に4歳は筆者と高橋麻衣教諭、大学幼児教育選修4年生の豊田梨沙子和有川さゆり教諭、5歳は筆者と大和紀子教諭、豊田梨沙子和中村晴美教諭で2グループに分かれて行った。木彫の鑑賞については、筆者と寺地トク子教諭で協力して保育を行っている。いずれも丁子ゼミ学生の協力で記録を行った。その後、国語教育講座：共同研究者に助言を求めた。絵画鑑賞は、附属幼稚園のさくら組（4歳）とぼぶら組（5歳）を対象に、2012年7月4日（水）から6日（金）と7月10日（火）までの展示期間で対話による絵画鑑賞を行い、3歳ちゅうりっぷ組は絵画作品をみるのみとした。木彫の鑑賞は2012年7月4日（水）から7月10日（火）までの期間、3歳の保育室に木彫を設置した。研究は、大学作品出合い及び当日の対話の場面における言葉やビデオとICレコーダーによる記録から、子どもの言葉や動作などの様子を分析した。

研究成果：以上、幼児の鑑賞は子どもたちに好評で、言葉を育む場面として有効と思われた。3歳は、共に生活する木彫を大切にしていたし、4歳は自分の思いを話すことを楽しんでいたし、5歳児は理由を尋ねることで、自然と説明的に話をするようになっていた。このうち、比較分析では、全体の発話文のうち4歳は37.5%が、5歳は45.1%が子どもの同士の意見やキーワードに関わって発想したり、まとめたりし、関連して話していた。保育者インタビューでは、5歳児担任より5歳児のA児がその後、みんなの前でよく話すようになっており、そのきっかけになった可能性があるとのこと意見があった。3歳児担任からは、子どもたちが木彫を癒しの存在、仲間として大切に思っていた様子が語られ、貴重な経験になったという意見があった。また、後日、保護者へ配布されたアンケートでは45名の回答があり、そのうち、絵をみたり木彫と遊んだりしたことについて30人（66.7%）の子どもが自ら母親に話をしたことを記憶していた。加えて、この活動について自由記述でも、回答のあった保護者の39人（86.7%）がよい、うれしい、ありがたいので継続してほしいという肯定的な文章を記していた。保護者の子ども理解にもつながる実践であった。これらについて、学会での2件の口頭発表を終え、科研報告書への記入が予定されており、また、今後、学会誌論文の作成、著書や新たな科研への掲載、研修などで紹介していくことを計画している。

資料写真（左から順番に3歳、4歳、5歳の様子）



○本報告書は、本学ホームページを通じて学内外に公開いたします。

○本経費により作成された成果物や資料等については、必ず全て添付願います。

○研究テーマが2ヶ年計画の場合は、本報告書を平成25年度審査会の判断材料の一つといたします。